

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2013.12) 平成24年度:119.

看護診断からみえた看護実践における外来HIV担当看護師の困難感

久保千夏、矢羽々みえ子、石上香、林有紀、伊藤廣美

演題名：看護診断からみえた看護実践における外来 HIV 担当看護師の困難感

○久保千夏、矢羽々みえ子、石上香、林有紀、伊藤廣美
旭川医科大学病院

【目的】看護診断からみえた看護実践における外来 HIV 担当看護師（以下 HIV 看護師）の困難感を明らかにし外来患者の支援体制を検討する。

【方法】1. HIV/AIDS 外来通院患者 3 名の看護記録から看護診断，看護介入を抽出した。2. HIV 看護師にインタビューし，看護診断に基づいた看護実践上の経験を自由に語ってもらいその中から困難感の内容を表す語りを抽出した。

【結果】1. 看護診断は 10 診断が抽出された。2. 看護診断に対する実践で HIV 看護師が経験した困難感：1) 非効果的自己健康管理；定期通院の奨励，自覚症状出現時の受診と健康管理方法の指導を行った。しかし，自覚症状出現時に事前連絡がないまま受診する事があり調整に手間取った。患者が自己で対処する健康管理法について相談を受けたいが，必要な面談時間の確保ができず十分話し合えたか不安になった。2 次感染予防行動について働きかけたいが患者の仕事上時間的な制約があり，セクシャルカウンセリングの為の関係作りが困難だった。2) 非効果的コーピング；患者は相談したい事を語り合う機会がなく，HIV 看護師が解決策を見出すようにカウンセリングを行ってきた。次の外来受診日までの心理的支援として電話訪問が有効と考えるが仕事等で容易にかける事ができなかった。3) 社会的相互作用障害；職場や家族に病気の相談ができず孤独感を抱えている患者の面談をしてきた。家族やパートナーを含めたコミュニケーションを促進する働きかけに力量不足を感じた。

【考察】HIV 看護師は，健康管理法として症状出現時の対処方法の指導，セクシャルカウンセリング，家族やパートナーを含めたコミュニケーション促進の為の面談時間の確保が不十分な事に困難感を抱いている。この為タイムリーな心理的支援や時間確保にむけてスタッフ間のサポート体制を整え，連絡方法を明確にする必要がある。また，患者が社会生活を継続し，自ら情報収集するための手段の提示が必要と考える。